

自由応募分科会 5 ポスト・マハティール期のマレーシア政治 報告 3

鈴木絢女（同志社大学）

ポスト・マハティール期の政治制度改革: 扇動法修正過程にみるリーダーの生存と政治の自由化
Between Political Reform and Survival: Sedition (Amendment) Act 2015 under Najib Administration

マレーシアにおける市民的・政治的自由を制限する議会立法は、政治家や政党、市民団体の行動に一定の枠をはめ、政権を反対勢力から守ることで、政治的競争を抑えるのに役立ってきた。しかしアジア通貨危機に起因する政治闘争において、マハティール（Mahathir Mohamad、1981-2003）が自らの地位を守るために扇動法などを用いて政敵を抑圧したことを契機に、既存のルールに対する市民の不服従や政治の自由化を争点とする野党勢力の伸張が起こる。

マハティール政権を継いだアブドラ（Abdullah Badawi、2003-2009）政権とナジブ（Najib Razak、2009-）政権は、政治の自由化を求めて野党を支持する都市部有権者への対応として、政治制度改革を約束した。しかし、結論からいえば、この制度改革は自由化に逆行するものとなった。ポスト・マハティール期の政治制度改革は、なぜ逆行したのか。

本論文は、2015年扇動法改正法を事例としてこの問いに答える。扇動法は、政府に対する批判や、民族や言語問題に関する言論の自由を制限する法律であり、2012年に撤廃が約束されたにもかかわらず、その約3年後に刑罰の厳格化や言論の自由を制限する分野の拡大を含む修正法案が成立した。

このような政治制度改革の逆行は、「首相の生存」という要因から説明される。首相は、有権者一般からの支持を獲得する必要がある一方で、党首＝首相を選出する権力を持つ与党連合国民戦線（BN）内の最大与党統一マレー国民組織（UMNO）の支持も取り付ける必要がある。しかも、UMNOやBNは、制限的立法の維持を志向し、政治の自由化に抵抗する。野党支持の自由化勢力と保守的与党との間で首相が綱渡りを強いられるこのような状況で、首相が与党内からの挑戦に直面する場合、彼は自身の生存のために、自由化を退行させる。本論文は、下院議事録や新聞報道を主たる資料として、ナジブ首相が自らの不正資金疑惑等によって与党UMNO内からの挑戦に直面するなかで、自由化アジェンダを放棄する過程を描く。